

C型肝炎はC型肝炎ウイルスが肝臓に感染し、慢性化した病態のことを表します。10年以上の長い年月をかけて徐々に肝臓を傷つけ、肝硬変や肝がんを起す非常にやっかいなウイルスであることが知られています。C型肝炎治療と聞いて皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。「治りにくい」「治



徳島大学病院消化器内科 友成 哲 医師

療薬はインターフェロンで副作用が非常に強い」などのイメージが強いのではないかと思えます。しかし、これまで標準的にC型肝炎治療に用いられてきた注射薬のインターフェロンはほとんど用いられなくなり、現在は内服薬でC型肝炎を治療する時代に変化しました。

治療成績も劇的に向上し、ペグインターフェロンとリバビリンの併用療法による著効率が50%程度であったのに対し、現在の内服薬では95%程度の著効率が得られることが知られています。またインターフェロンの副作用でみられたような発熱や倦

怠感もなく、副作用が軽微であることから、高齢者に使用されるようになっていきます。

しかし、体内からC型肝炎ウイルスを排除することができても、これまで悪くなってきた肝臓が完全に良くなるわけではありませぬので、引き続き経過を観察する必要があります。特に肝臓がんの出現には注意が必要で、超音波やCT(コンピュータ断層撮影装置)、MRI(磁気共鳴画像装置)を用いた画像検査は非常に重要です。

C型肝炎は治る時代に

また、登場からまだ歴史の浅い新薬であり、処方を受けるには肝臓専門医の診断が必要になります。治療を受ける患者の状態に依りて処方しなければ、思わぬ副作用が出現したり、耐性ウイルスを出現させたりしてしまうことにつながります。

これらの内服薬の医療費は公費助成の対象となりますが、肝臓専門医の診断書が必要です。したがってC型肝炎を患っている方は早期に肝臓専門医のいる専門機関で受診し、肝硬変や肝がんを防いでいただきたいと思います。